片山正直著「倫理學新講」を讀む

川村喜久治

世に倫理學概論として公刊されて居る書物は實に多いが、本書の如く明かに背後に吾が日本の哲學田邊哲學をもち、そこに立場をとつて終始變らざる一貫の論理を進めてゐる書は皆無といつてよい。田邊哲學の絶對現實の論理は難解と世間で云はれて居るものであるが、それを斯程平明に、而かも倫理學的諸問題に聯關させて其側面的展開をすることは田邊哲學そのものが著者其人の血となり肉となつて消化されてゐなければ不可能であらうから、この一書は結局片山氏其人の倫理觀を語るものと云つて差支へない。

氏に依れば、人は個體的、共同體的、全體的(世界的)といふ三重相卽の本質存在であるが特に其共同體的存在が全と個とを媒介統一する。共同體を中心として個人と世界とは統一され、此統一を通じて共同體は展開される。個人と共同體と世界との三は一であり一は三である。この三卽一的構造をもつ働きが吾々の行爲であり、斯かる人間の本質的存在性格の純眞なる統一展開が倫理道德に外ならぬ(十五—十七頁)。此等三者は無雜作に一に融合してゐるのでも亦對立的に三となつてゐるのでもなく、眞實には互に他を否定し合つて夫々の獨自性を現はしつつ同時に單に否定に停滯せず否定を否定して絶對否定的に歸一し而かも新たなる否定へ再び展開してゆく。これは「尊嚴なる絶對否定的歸一の道」であり「自由なる絶對肯定的造立の道」であり根本倫理に外ならない(一四四頁、一六〇頁)。此處に明瞭に絶對現實の田邊哲學の論理を見る。尙ほ著者が序文にも語つて居る如く和辻

倫理學の著者の倫理觀への決定的影響も同時にここに發見することが出來るであらう。

唯和辻倫理學からより多く日本人的思索の獨創性を學んで田邊哲學からより多く體系的整合性と徹底性を獲得したと考へられるのは、個人・共同體・世界の三卽一的構造に相應して個人に於てと同樣に種的基體たる民族共同體に於ても構造契機として「土」「血」「靈」の三者があるとし、此等三者がその種性の否定を通じて、民族の風土たる「土」は天地卽ち自然的世界を、民族の「血」は人類的世界を、民族精神たる「靈」は精神的世界をもち、この自然的・人類的・精神的世界の三者も共に世界の構成契機として統一され、結局種的基體の種性を否定的媒介としてこの天地的・人類的・精神的世界は自己開示され、世界はここに世界する（九三頁以下）といふ如き絕對辯證法的思索が巧緻と思考される程に本書の凡ゆる問題を轉開させてゐるが、これは田邊哲學に負うて居ると思惟されるからである。然し其影響の何處から來りたるかを問はずとも此書を通じて最後の一頁まで貫く整合性と徹底性とが讀む者を驚かしめる程であること、著者の苦心と努力との容易でなかつたことを想像させる。

吾々が倫理の何たるかを知らうとし又倫理的疑問に苦しんで世に倫理書として發刊されてゐるものを繙いて失望することは、夫等の倫理書は危げのない平板な概論風の敍述は完全であるが、倫理の何たるかを體系的深みから說いてゐないことであり何等眞摯なる人生の倫理的疑問に答へて吳れないことである。本書は倫理學の概論として飽くまでも基本的諸問題を解明しつつ體系的深さを底に把持して人間生活の、倫理上の、又國民生活上の諸々の問題に廣く觸れ夫等の諸問題に明快なる解答を與へ暗示的な光明を投げてゐる。例へば死の問題（三〇〇頁）、惡への傾向、根本惡（二三頁、三三〇頁）良心（一二〇頁以下）自由（八七頁以下）の問題、延いては個人主義、マルクス主義又は唯物史觀、所謂全體主義、ヒュマニズム、新ヒュマニズムの批判（一七七—二〇四頁）にも及び、且つ現代の重要問題たる正義の解明（二三一頁以下）、戰爭の倫理（三〇九頁以下）、國家の論理（二七二頁以下）等多岐多端に

互つて論ぜられてゐる。斯くの如く永遠の問題から現下切實の問題に至る包括的論述を概論としての本書に於て取上げてゐることは、たとひ十年を超える講義を經ての結果の著述とはいへ、偏へに著者の眞面目なる努力と熱情的性格とに依るものと想はれて深く敬意を表したい。勿論ここに併せて注目さるべきことは田邊哲學そのものが斯かる廣汎なる諸問題を展望と視野の裡に收め得るものであるといふことである。

從つて此書は田邊哲學に基底づけられるといへるから、個人・共同體(種的基體)・世界の三者のうち、共同體が基體卽主體たる中間的媒介者として具體的現實在であつて、個人と世界とは一應共同體の外に成立つが、共に共同體に統一されて新たに可能なる共同體の生起卽ち建設の契機となり(二四六頁)、倫理道德は個人の意欲の事柄でもなく、單に人格意志の內容でもなくて、それは要するに原本的に人倫の眞實相として種的基體の內奧に横はる(一一〇頁)といふことになる。斯くて個人の自己企畫實現行も共同企畫建設行も世界企畫開示行も共に相卽するところに充全なる人間活動を視るとする。ここに從來の他の哲學體系又は倫理學體系に見ざる特異にして强靱なる國家論理を見るが、此書の獨異性も亦ここに歸着する。

終りに一二著者に望むべき點を指摘すれば、倫理學が方法として諸々の既存の倫理學、倫理史を含む倫理の歷史科學を媒介として其考察と批判とから內に歸つて現實在を否定的媒介として獨斷的ならざる「批判的精神に依つて貫かれた絕對媒介的方法」をとらねばならぬとするならば、少くとも今日までの重要なる諸他の倫理學體系の媒介批判が本書に於ても企てらるべきである。また著者が既に宗教哲學の研究學徒として知られてゐるだけに評者の此書に期待したことは、著者の宗教的思想が如何程倫理觀を深めてゐるかといふことにあつたが、此期待は半ば充たされ半ば裏切られた。それは特に最終の章に於て世界過程は善であるか否かの設問をなし、世界は必ずしも善人の味方ではなくて世界は善を造ると共に惡をも造つたのであると鋭く迫りつつ、斯かる罪惡の根據を

世界そのものの構造に求めて、個人の多種多様性と個人の相互斷絶獨存性を取出し、結局世界構造の廣さと深さとが斯かるものを將來したのであるとして倫理的世界觀を說くに留まる。然し倫理的世界觀は宗教的世界觀によつて眞に全きを得るのではないか。倫理的行は宗教的信によつて眞に祝福を獲るのではないか。

本書が近來稀な快著として廣く一般に讀まれむことを評者は特に祈るものである。（大阪大同書院菊判三四二頁定價貳圓八拾錢）

寄贈圖書

稲富榮次郎著　無と直觀　東京　定價　理想社出版部　貳圓四拾錢

稲富榮次郎著　スピノザの哲學　東京　定價　理想社出版部　貳圓五拾錢

山口論助著　空と辨證法　東京　定價　理想社出版部　貳圓五拾錢

早稲田大學文學部編　哲學年誌第九卷　東京　定價　理想社出版部　貳圓

平田內藏吉著　坐の研究　東京　定價　壹圓五拾錢

寄贈雜誌

十月號　史林、哲學雜誌、思想、理想、文化、丁酉倫理講演集、法學論叢、經濟論叢、法學、一橋論叢、學校教育、信濃教育、精神科學（特輯專勢と國民教育）、哲學評論、社會學徒、國民醫學、全人、願望、學藝展望、湖畔の聲、禪學研究、書淪、文化日本、國民思想

十一月號

前號目次

國家的存在の論理（承前）……文學博士　田邊元

三願轉入に就いて……文學士　武內義範

科學の價値と本質……文學士　中川秀恭（カール・ヤスパース）

行爲の表現的性格……文學士　柳田謙十郎

——木村素衛著「表現愛」に就いて——

高坂正顯著「カント」……文學士　谷山隆夫